米原歴史街道

米原市の歴史・文化財を歩く(137)

霊仙山頂での縄文人の足跡

―一万年前の石器を発見！―

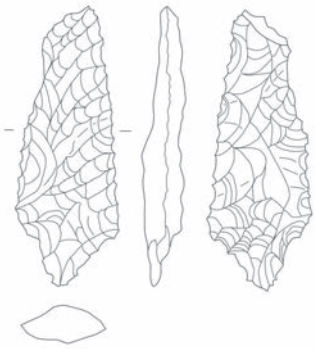
石器の名は有舌尖頭器

米原市にそびえる伊吹山（一三七七メートル）と霊仙山（一〇八四メートル）は、江戸時代の郷土史「淡海温故録」（一六八〇年頃編さん）に比良山・綿向山とともに近江の「大山高峯也」、「淡海木間攫」（一七九二年）に「江陽四高山」と記された滋賀県を代表する高山です。伊吹山頂では、これまでに一四点の縄文時代の石鏃と一点の石のナイフ、石を割ったくずが見つかっています。一方で、南に向かい合う霊仙山では、時代を問わず、これまでほとんど考古学的な発見はありませんでした。ところが、昨年七月、霊仙クリーンロードクラブの中村さんが、登山道の保全確認中に山頂手前の鞍部（標高約一〇〇〇メートル付近）で、一点の石器を採集されました。霊仙山の山頂で縄文の狩人の活動の足跡が初めて確認されました。

この石器は有舌尖頭器（写真・図）とよばれるもので、その形や製作方法から、縄文時代の初めごろの一万年前（草創期）のものと考えられます。

石器は、灰黒色の粘質感のあるチャート製で、ところどころに石英の白い筋が網の目に入っています。先端がわずかに欠けていますが、長さ五・二センチメートル、最大幅二センチメートル、厚さ〇・七センチメートル、重さ八グラムを測ります。片面（実測図の左側）は見栄えを意識して、斜めに細く、ていねいに石を割った跡が並び、縄文人の高い製作技術がみられます。側縁はまっすぐで、のこぎりの歯のように仕上げられています。下部は逆三角形で、断面形はレンズの形をしています。これらの特徴から、縄文時代草創期（約一万年前）の石器と判断しました。

▲有舌尖頭器



▲実測図

山頂からの出土

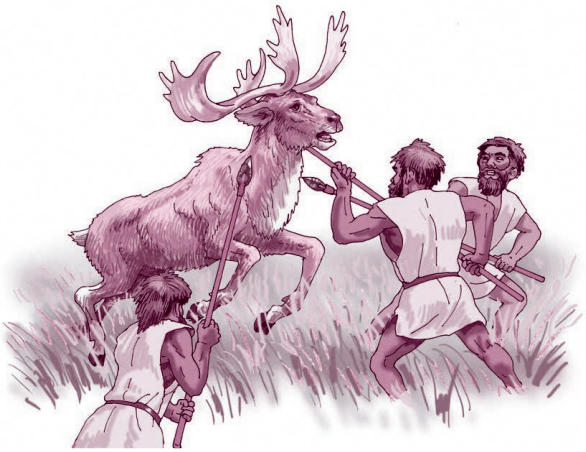
有舌尖頭器は、旧石器時代から使われたもので、人類最古の狩猟道具の一つである投げ槍の先端に付けられました（想像図参照）。今回の石器は比較的小さいことから、ウサギなどの小動物を対象にしたものと考えられます。その後、弓矢が発明されて、その役割を終えます。

米原市内では、これまで四点の有舌尖頭器が出土しています。大乾古墳群（上多良）、狐塚遺跡・高溝遺跡・法勝寺遺跡（高溝）で、いずれも琵琶湖岸の標高八五～九〇メートル付近の低湿地で見つかっている遺跡です。滋賀県全体の縄文時代草創期の遺跡を見ても、湖南と湖東の低い丘陵の縁辺部、琵琶湖や内湖、瀬田川周辺の低地や湖底に大部分の遺跡が立地しています。このなかで、今回の霊仙山頂一〇〇〇メートルの出土地点は注目されます。

霊仙山頂は冬季の積雪が多く、強風が吹き、石灰岩地で水持ちが悪いため、樹木が育ちません。このような厳しい自然環境にポツンとのこされた石器について推測してみます。

実は草創期の縄文人は、定住生活ではなく、石器の石材獲得などのために産出地を回遊し、狩場を求めて移動する生活をしていたと想定されています。また、岐阜県や長野県では一〇〇〇メートルを超える高地での発見例もあり、鈴鹿山麓を行き来した人々にとって、一〇〇〇メートルの高低差は困難なものではなく、逆にこの高低差は、四季の食べ物の多様性を生み出す格好の場所ともいえます。今回の出土地点は決して特異なものではなく、今後、高地での遺跡発見の可能性を暗示するものと考えられます。

（歴史文化財保護課）



▲槍を使った狩りの想像図